くを緊くいへる詞也、

〔書言字考節用集九辭〕驚怖（キヤウフ）　驚動（キヤウドウ）　驚騷（キヤウソウ）

〔名物六帖人事四性行笑啼〕亡魂（タマヒカス）南史韋叡傳、楊大眼、將萬餘騎來戰、矢貫二大眼右臂一、亡魂而走、　喪膽（キモトリウシナフ）破膽言行錄、西賊聞之驚破膽、　落膽（キモツブス）韻府、落膽唐書、

〔日本釋名五言語〕物に驚くことを、東國にてたまげると云、下總にてちめうしたと云、津輕にて動轉したと云、出雲にてをびへると云、又肝をつぶすと云、びつくりしたなどいふ詞は、諸國の通語也、土佐の西境にては、たまげるといふ、上土佐、中土佐には此稱なし、薩摩にては、たまがると云、案に東國にていふたまげるは、源氏に魂消（たまけ）ると有、げるは消也、けぬがうへなるふじの初雪とよめるは、消ぬがうへなる也、

〔類聚名義抄六心〕悸（其季反心ハシリ）　悸心ハシリ

〔源氏物語五十浮舟一〕めのと、あやしく心ばしりのするかな、ゆめもさはがしくとの給はせたりつ、殿ゐ人よくさぶらへといはするを、くるしと聞ふし給へり、

〔源氏物語湖月抄五十浮舟一〕心ばしり（細○細流抄）むなさはぎのする也

〔日本書紀一神代〕天照大神素知其神（素戔嗚尊）暴惡、至聞來詣之狀、乃勃然而驚、（略○下）

〔日本書紀十四雄略〕九年五月、韓子宿禰從後而射大磐宿禰鞍瓦後橋、大磐宿禰愕然（オトロキ）反視、射墮韓子宿禰於中流而死、

〔古事記下雄略〕爾赤猪子答白、其年其月、被天皇之命、仰待大命、至于今日、經八十歲、今容姿既耆、更無所恃、然顯白己志、以參出耳、於是天皇大驚、吾既忘先事、然汝守志待命、徒過盛年、是甚愛悲、

〔古今著聞集十三哀傷〕法興院入道殿（藤原兼家）かくれさせ給て、御葬送の夜、山作所にて万人騷動の事有けり、町尻殿（藤原道兼）おどろかせ給て、御往反有けり、御堂殿（藤原道長）はすこしもさはがせ給はで、人